

新潟市立小針小学校



とぼりの子



平成30年9月7日発行

No.5

児童数 709名

こだまのように ~響育~

校長 長谷川 豊

東日本大震災直後、多くの企業がCMを自粛し、その代わりにAC（公共広告機構）のCMが放送されました。金子みすゞの詩「こだまでしょうか」が流れました。

「遊ぼう」っていうと、「遊ぼう」っていう。
「ばか」っていうと、「ばか」っていう。
「もう遊ばない」っていうと、「遊ばない」っていう。
そうして、後でさみしくなって、
「ごめんね」っていうと、「ごめんね」っていう。
こだまでしょうか、いいえ、誰でも。

「こだま」とは、「木霊^{こだま}」のことであり、山で投げ掛けた言葉がそのままはね返ってくることを言います。「ヤッホー」と言うと、少し時間が経って、半分の大きさになって戻ってきます。それでも、こちらの存在を丸ごと受け入れて返してくれます。こだまが返ってくると嬉しくなります。大自然の懐に包まれている安心感を与えてくれ、心を優しくしてくれます。

私が子どもの頃は、こだましてくれる大人に囲まれていました。「痛い。」と言え、ば、「痛いね。」とか、「痛かったね。」と言ってくれるおばあさんやおじいさん、お母さんやお父さん、近所の大人がいました。

痛いときに、「痛いね。」と言ってもらうと、痛さはいつの間にか半分になっていました。そして、「痛いね。よく我慢したね。偉いよ。」と繰り返し言ってもらうと、痛さはいつの間にか消えていました。また、「痛いの痛いの飛んでいけ」という呪文を言ってもらうと、おかしくて、痛かったことも忘れてしまったように思います。

今はどうでしょう。子どもたちの声に、ちゃんとこだまが返っているのでしょうか。子どもが「痛い。」と言ったときに、「痛くない。」という大人が増えているのではないのでしょうか。何も言わず、知らん顔の大人が増えているのではないのでしょうか。

よいことも悪いことも、投げ掛けられた言葉や思いに反応しなければならないのは、親であり、私たち教師です。相手の言葉を繰り返すだけでも、相手の気持ちに寄り添うことができます。それは、こだまでなく、誰にでもできるんだよと、金子みすゞは言っているように思います。

積極的な子や目立つ子に対して、こだまのように響かせることは難しいことではありません。しかし、学校には、おとなしい子、引っ込み思案な子、目立たない子がたくさんいます。その子たちも発信しています。ただその声は、「細く、弱く、遠慮気味」のため、聞き逃してしまうことがあります。

私たちは、子どもたちの「細く、弱く、遠慮気味」の声も聞き逃すことなく、無視することなく、しっかり受け止めて、こだまのように響き合うことに努めます。

